

〔一〕

つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

ほどなく、一家は奥さんの運転するワゴン車に乗ってやって来た。驚いたことに、家族の中に、「子ども」と呼べるほどの子どもはいなかった。上のお兄ちゃんは詰襟の制服を着た高校生で、顔はすでに大人だったし、下の妹も、地元の中学校のジャージ姿で、顔や体型に幼さは残っていたけれど、お子様ランチを食べたがるほどの子どもではなかった。そして、足が悪いおばあさんの車椅子をゆつくりと転びそうになりながら押しているのは、先日奥さんが、「ちょっとボケちゃってる」と話していたおじいさんだった。おじいさんは、鉄のお面をつけているみたいに無表情だ。これは、一家が席について食事を開始してからわかったことだけれど、おじいさんは、ちよつとどころかなりボケてしまっていた。お子様ランチを食べたがっていたのは、子ども達ではなく、主賓であるおじいさんだったのだ。

おじいさんは、お子様ランチを前にすると、無表情のまま、ゆつくりと、時に激しく猛スピードで、次々と自分の口に食べ物を詰めこんでいく。スプーンやフォークやお箸など使わず、全部手づかみだった。時々、食べ物を口に入れたまま、思い出したように呪文のような言葉をへー１とつぶやく。一家は、おじいさんがどんなに行儀の悪い食べ方をしても声を荒げることなく、おじいさんの食べるスピードに合わせながら、みなでお子様ランチを食べていた。量がそれほど多くないお子様ランチは、六人とも、あつという間に食べ終わってしまう。私はすぐに空いたプレートを下げ、テーブルクロスも新しいものに取り替えて、素早くパースデーケーキの準備をした。あまり時間がないのです、と、事前に奥さんに言われていたのだ。

一家は、明かりを消した食堂かたつむりで、ろうそくの灯ったパースデーケーキを真ん中に置き、声をそろえて手を叩きながら、「ハッピーバースデーおじいちゃん」と、繰り返し繰り返し歌っていた。最初、湿っているのは、奥さんの、若干音程の外れたソプラノヴォイスだけだった。けれど次第にそれは、娘さんに移って、息子さんに移って、旦那さんにも移って、更には伝染病のようにおばあちゃんにまで移ってしまい、最後は涙声での大合唱になった。

歌が終わって、「おじいちゃん、おめでとー」の声の後に続いたのは、パチパチパチパチという拍手ではなく、悲鳴に近い啜り泣きの声だった。まるで、言葉は悪いが、おじいさんが亡くなってしまったのを悲しむかのような雰囲気だった。それでも、おじいさんは表情を変えずにろうそくの炎を弱い息で少しずつ消していき、一瞬だけれど、食堂かたつむりはぽっかりと静寂の闇の中に包まれた。一家は、パースデーケーキも、へー２と食べていた。一体、この家族に何があったのだろうか？

確におじいさんはボケてしまっている。それは確かだ。けれど、そんなおじいさんのお誕生日を好物のお子様ランチやパースデーケーキで祝ってあげようというやさしい家族が、そろいもそろって歌いながら涙を流しているのだ。いくらおじいさんが過去の記憶を失って、もう家族の誰の名前も正確には思い出せなくなってしまうとしても、お祝いの席でみんなそろって号泣するなんて。

謎が解けたのは、一家が席を立ち、奥さんが会計を済ませるために厨房台所の入り口の方へやって来た時だった。「これから、施設に送って行くんですよ……」奥さんは無理に笑顔を作ってそう言った。「家族六人、ずーっと一緒に暮らしてきたからねえ、辛くって。だけど今日は助かりました。家のおじいちゃん、なんだか知らないけど、お子様ランチ食べると、眠りが深くなってくれるんです。このままみんな、おじいちゃん眠っている間に預けに行こうって、ずいぶん前から決めてました」奥さんは気丈にそこまで言い終えると、深くため息をついた。

きつと、しっかりとしたやさしいおじいさんだったのだろう。足の悪いおばあさんの車椅子を押すのは、絶対に他の人にはやらせたくないらしい。おじいさんは最後まで、他の家族が手伝おうとするのを拒んでいた。

おつりを受け取りながら、奥さんは言った。

「でも、おじいさんと、もう会えなくなるわけじゃないしね」

そして、こう続けた。

「また来ますよ。おじいさんの大好きなお子様ランチ、作ってあげてください。今日の、私が作るのより、ずーっと味がよかったから」奥さんは、しっかりと口調でそう言い終えると、家族の待つワゴン車へと足早に戻って行った。私は外に出て、一家を見送った。窓際の後部座席に寄せられたおじいさんの顔が、一瞬だけ、月明かりに照らされてはつきりと見えた。

今夜は、満月。おじいさんはぽっかりと口を開けたまま、どこでもない宇宙の片隅を、ぼんやりと見つめていた。私の目には、どうしても、おじいさんが自分の行く末を全部知っているように思えてならなかった。おじいさんの表情は、すぐに、直進したワゴン車と一緒にばんしゅうの肌寒い夜の中へとかき消された。けれど、私はその表情を見逃さなかった。なぜならそれは、拒食症のウサギと同じ瞳だったからだ。

見送りを終えて厨房に戻った私は、しゃがみこんでウサギの様子を観察した。相変わらずウサギは、起きているでも寝ているでもない、まさに無気力状態で、手足をだらりと放り投げ、木箱の底に横たわっている。お前、このままでは死んでしまうよ——と、私は心の中でウサギに向かって語りかけた。それでも私は、こんな状態でも、ほんのかすかな□□の光を見逃してはいなかった。

それはさつき、私が一家の食べるパースデーケーキを冷蔵庫から出した時のこと。ウサギが、かすかに首を持ち上げて、ケーキの方をちらりと見たのだ。あいにく、パースデーケーキはホール状で出さなければ意味がないので、ウサギにその場でおすそ分けしてあげることはできなかったのだけど、その時のウサギの行動は、ウサギが隠し持っている過去に、何らかのヒントを与えてくれそうに感じたのだ。そう思いはじめたら、脳裏には、このウサギの抱える背景が、まるで物語を作るように、スルスルと勝手な空想として浮かんできた。

すっかり後片付けを終えてから、私はウサギのためにビスケットを作ることにした。ウサギの艶やかな毛並みといい、きちんと箱に入れて置かれていたことといい、中に添えられていた手紙といい、この子はきつと、とても大事にされていたのだと思う。つまり、家族に愛されなくなつて捨てられたのではない。ワープロの手紙はちよつと素っ気ない印象がしなくてもないけれど、それは逆に、悲しく複雑な感情に重たいふたをかぶせたことで、最後に行き着いた必要十分な一文のようにも受け取れる。そしておそらくこのウサギは、血統書付きの由緒正しいウサギだろう。私はウサギについてそれほど詳しくはないけれど、どう見ても品があるし、ふつうに学校などで飼育されているウサギとは種類が違う。つまり、ウサギを飼っていたのは、裕福な家なのではないだろうか。そこでウサギは、とても大切に、愛情豊かに、家族の一員として飼われていた。けれど、いくら大切に飼われていても家族の愛情だけでは乗り切れない何らかの事情が発生したとする。家族もおじいさんと暮らしたいし、おじいさんも家族と暮らしたい。だけど、どうしてもそうすることができない時、家族はきつと、苦渋の決断をしなければいけなかったのだろう。おじいさんはその、家族の複雑な決断の中身を、へー③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿のように感じていたのかもしれない。同じようにウサギもまた、共に暮らしていた飼主の、並々ならぬ事情を察していたのかもしれない。どちらも何も語らないけれど、表情は同じだったもの。たとえ相手の立場や気持ちがわかっていても、孤独になる苦しさには変わりはない。

ウサギは、捨てられた箱の中で何を見ていたのかな。ちよつと想像しただけで、逃げ出したくなった。真つ暗な闇。誰かが近づく足音。遠ざかる声。かすかな光。言葉にできない、淋しさや孤独。哀しくて、もう一度ご主人様に会いたくて、一刻も早くご主人様の胸に抱かれたくて、ウサギは薄暗闇の中、泣いていたのではないだろうか？ 実際に涙は出なくても、心の内側ではしくしくと悲鳴を上げて泣いていた。そして泣き疲れて、もう、ぼーっとするしかないくらい、生きること④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿にしたのかもしれない。それは、今もお続いているのかもしれない。だから、食べることをやめたのだ。

私は、ビスケットの材料を両手で混ぜながら、ウサギの過去に思いを馳せた。ウサギはきつと、裕福な家庭で、甘いお菓子①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿を日常的に与えられていたのではないだろうか？ と、あの時にふと思ったのだ。だからこそ、さつき、ほんの一瞬だけれど、シフォンケーキの甘い匂いにかすかに反応を見せたのだろう。だから、甘いお菓子ならもう一度食べてくれるかもしれない。

今夜、私は食堂かたつむりに泊まることにしよう。拒食症のウサギが口を開いて食べ物を受け入れてくれるまで、私の今日は終わらない。私は、拒食症のウサギをしっかりと胸に抱きかかえてふとんにもぐった。ウサギにすぐに□□⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿してもらおう、なんて甘い考えは持っていない。けれど、もしもこのウサギが、ご主人様をはじめ家族のみんなから大事にされていたなら大事にされていただけ、ウサギは誰かの温もりを必要としているはずだと思う。自分をウサギに置き換えたって、誰かにただ黙って抱きしめられたい、と思う。私はかんい②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ベッドの上に体を横たえ、ウサギと向き合うようになつた。そして、手のひらにさつき焼いたビスケットをいくつかのせ、もう片方の手で絶えずウサギの体をさすってみた。

その夜、私はウサギの呼吸の番人だった。何度となくハツとして目を覚ましては、ビクともしないウサギの鼻先にへ 4 手のひらをかざし、息をしているかを確かめた。その度に、ほんやりとした頭のまま広げた手のひらにのっているビスケットの数をかぞえた。残念だけれど、一粒さえも減ることはなかった。浅い眠りが続いていた。果たして自分が眠っていたのか起きていたのかも、はつきりしない。ずっと考え事をしているようだった。ウサギがこのまま死んでしまうのではないかと不安で、胸がいっぱいだった。昨日会ったばかりなのに、私はすっかり、拒食ウサギの友人になっていた。友人を、死なせたくない。

やがて空が白みはじめ、外の世界では、小鳥の囀りが聞こえはじめた。手のひらにかすかな違和感を覚えて目を開けた時、食堂かたつむりは、明るく清潔な光の渦の中に沈んでいた。まぶしくて、一瞬目の前が暗くなる。なぜかいつも以上に眠ってしまったらしい。外の世界は、もうすでに活気に満ち溢れている。

そしてなんと！私の手のひらをピンク色のかわいい舌で執拗にべろべろと舐めているのは、あの、拒食症のウサギだった。水切りをして生き返った植物の茎のように左右の耳をピンと立て、ひげも昨日とは打って変わって生気に満ちあふれている。何より、手のひらにのせていたビスケットが、ひとつ残らず消えているではないか。私は一瞬、自分が寝ている間に落としてしまったのかと思った。けれど、そうではなかった。やはり、ビスケットはウサギが口にしたのだ。つぶれないようにやさしく、でも愛情をこめてしっかりと。それから、木箱の中にもっとたくさんさんのビスケットを入れ、ボウルの水も取り替えて、ウサギをその中に移してやった。ウサギの耳を流れる青と赤の毛細血管が、太陽に透けて美しい刺繍のようだった。

元気になったウサギが食堂かたつむりの中を走り回るので、ちょっとかわいそうかな、とも思ったのだけど、ひもで繋いで外のハーブガーデンで遊ばせていた。意外にも、ウサギは繋がれることを嫌がらなかった。それどころか、とてもじゅうじゅんな様子だった。もしかしたら、これもまた私の勝手な憶測だけれど、ウサギも、繋がれていることで逆に精神的に安心するのかもしれない。それは、束縛ではなく絆なのかもしれない。食堂かたつむりをはじめてよかった。

つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

太陽が沈んでしばらくすると、真紅の夕焼けは長い時間をかけて入念に天地をおおい、人々はいつまでも川岸に身をよせて夕映えの中にひたっていた。

「いつまでも消えないのですね、この夕焼け」と私は思わずつぶやいた。

「タイの夕焼けはいつもこんなものです」とバンコックに住む知人は言う。

京都の愛宕山の夕陽は一瞬の間に消えてゆくのに、とそう思いながら私自身も真紅の細波をたてて輝く川面をいつまでも眺めていた。ゆるやかに流れる時間、天使の都と呼ばれるバンコックの夕空は次第に真紅に高昇し、すべてのものを陶酔^{とうすい}うつとりすることに誘いこむようであった。

水上都市と呼ばれるこの町の朝は早く、運河には小舟や観光船があふれていた。たわわに実るマンゴー、色鮮やかなプーゲンビリヤ等の花々の咲き乱れる岸辺に沿って船はゆるやかにすすみ、やがて対岸に突如、暁の寺が中天に聳え立ち、つづいてエメラルド寺院——いずれも表現の余地もないほどの装飾の極致である。暁の寺の塔の基壇はくまなく中国陶器を花形にかたどって鏤め、瑠璃、紫、緑、茶、紅などのガラスをびっしりはめこみ、そのすきまに金箔をぬりこめる。色と光は炸裂せんばかりに交響している。

一層、一層が幾重の夢、幾重の期待、幾重の祈りで押し潰されながら、なお累積^{るいせき}（重なり積もること）として、空に向かって躍り寄つて成した極彩色の塔……

（三島由紀夫『豊饒の海』『暁の寺』）

という表現を借りずしては語れない「ア」である。その壮麗な景観はバンコックの紺碧の空にびつたりはめこまれたかのように揺るぎない美の殿堂を誇っている。

久しく奈良、京都の寺院、仏閣を見なれたものにとつて、金箔の上にさらに金箔をぬりこめる金色燦然^{さんぜん}（きらきらと光り輝くこと）たる仏塔、仏像はにわかには受け入れがたい異国の風景であった。その衝撃は、例えば軒の深いほの暗い日本の家屋から、いきなり南国の強烈な直射日光の白昼にとび出して、くらくらとめまいのするような、まさに「色彩が突起した」というような特異な感覚の中に迷いこんだようだった。

しかし、寺院に詣でる人々は、蓮の花と線香を捧げて静かに合掌する。微笑の国にふさわしい、優しくおだやかな人々である。この世の外から、このタイと日本との表現の違いをながめてみたら、ちょうど、凸レンズと凹レンズのようにAとBとでもいいたいような、くつきりとした対象が写し出されることだろう。それはまさに民族のカルマ（人々のなう運命）といたいほどの対比である。京都嵯峨野においては、家の中から愛宕山の夕陽をみて、あわてて外に走り出る間にさえ消えてゆく夕日だった。気象、風土の違いとはいえ、北から南へ細長く伸び、湿潤（しめり気の多いこと）に明け暮れる列島の四季の変化は、ものの移ろう翳りをくまなくうつし出す。

川沿いにある一本の山桜は、今ようやく雪の枝をはらい春の蘇生息を吹き返すの態勢に入ろうとしている。やがて蕾はふくらみ、紅の花弁を川面に散らすだろう。うす緑のやわらかい新緑、そして落葉の時が来る。時雨、霧、風花と、こうした風景の中におのずと日本の色彩は生れる。

真萩散る 庭のあき風身にしみて 夕日のかげぞ 壁に消えゆく

夕づく日 軒端の影はうつり消えて 花の上にぞ しばし残れる

花の上に しばし残れる夕づく日 入るともなしに 影消えにけり

永福門院のこれらの御歌にあるように、それこそ日本的色光の世界である。金色燦然と輝くタイの仏像に比して、我々の拝する仏像は、香に燻されけむりで黒くすすけること、黒光りしてかすかに金や彩色がのこされてはいるが、完成されてからの歳月を自然にまかせ、剥げ落ちるものは剥げ落ち、散るべきものは散って千年近くの歳月を刻み、剥落の美を守ってきた。むしろ愛してきたとさえいえるだろう。我々は内へ内へ沈潜（しんせん）（深くしずみかくれるさま）する美を求める。抑えても抑えても匂い立つ色、否定をくぐりぬけて存在する色、夕日影のように今あつて無き色、ひともとの山桜にみる変容、それらは我々をとりまく自然の風光の中で、長い歳月をかけて形

- 〔一〕 つぎのア～ウは文中のどこに入りますか。最もふさわしい部分を探して、そのつぎの文のはじめの五字を書きなさい。
句読点もふくみます。

ア けれど物言わぬウサギに通じることはない。
イ そう、さつきみなでお子様ランチを食べて帰った家族の、あのおじいさんのように。
ウ 私はウサギを精一杯の愛情で抱きしめた。

- 〔二〕 1～4にはどんなことばが入りますか。つぎのア～ウの中から最もふさわしいものをそれぞれ選び、記号で書きなさい。

ア ゆうゆう イ もくもく ウ たまたま エ ぼそぼそ オ おそろおそろ
カ せかせか キ うすうす ク かわるがわる

- 〔三〕 ⑦～⑩にはどんなことばが入りますか。ふさわしいことばを考えて、二字の熟語を書きなさい。

- 〔四〕 線アで「やさしい家族」とありますが、おじいさんへ的心くばりは他のどんな行動に表れていますか。最もふさわしい部分を一文で探し、はじめの六字を書きなさい。句読点もふくみます。

- 〔五〕線イで「同じ瞳」なのはなぜですか。おじいさんとウサギに共通する複雑な気持ちを表している部分を一文で探し、はじめの六字を書きなさい。句読点もふくみます。

- 〔六〕線ウのように「私」が思ったのはなぜですか。この一日の体験から「私」が感じ考えたことを自分のことばで書きなさい。

- 〔七〕線①～④を漢字に直しなさい。必要なら送りがなも書きなさい。

- 〔二〕 (一) ア～エにはどんなことばが入りますか。次の1～6の中から最もふさわしいものを選び、番号で書きなさい。

1 緊張感 2 多様感 3 違和感 4 爽快感 5 重圧感 6 躍動感

- 〔二〕線①～⑥のことばの中で、他の四つと成りたちの異なるものを二つ選び、番号で書きなさい。

① はめこむ ② 見なれる ③ 受け入れる ④ ほの暗い ⑤ とび出す ⑥ ながめてみる

- 〔三〕線イとありますが、それはどのような様子のことですか。最もふさわしい部分を二つ、それぞれ二十字以内で探し、はじめと終わりの三字を書きなさい。句読点もふくみます。

- 〔四〕線A、Bにはそれぞれどんなことばが入りますか。文中から最もふさわしいことばを探して、二字の熟語で書きなさい。

- 〔五〕線ウとありますが、「変容」とは具体的にどのような様子のことですか。自分のことばで書きなさい。

- 〔六〕線エで「日本的」とありますが、それは「タイの美」と比較してどのような美しさなのですか。和歌の中のことばも使って文章全体から「日本の美」について説明しなさい。

[illegible]